

幾度もの流失から生まれた
我が国初の鋼ローゼ橋

す み よ し 住 吉 橋



かつて七つの川が流れた広島デルタは、川によって分断されていました。しかし、広島城の防衛のため架橋は許されず、城下町の発展のために許されたのが西国街道を結ぶ猿猴橋、京橋、元安橋、猫屋橋、小屋しんがいの橋（天満橋）、己斐橋と石州往来の横川橋で、本川（現・旧太田川）をはさむ舟入と水主町（現加古町）は、渡し船での往来を余儀なくされていました。このため明治43年（1910）、地元住民有志の出資で木橋が架けられました。これが住吉橋の発祥だと言われており、橋のたもとに佇む「住吉橋記念燈」にこの経緯が刻まれています。

当時、本川は広島と瀬戸の島々とを結ぶ要衝の地で、水上交通の安全も願って常夜燈にしたのでしょうか。住吉神社は、元文3年（1738）船府一統の守護神となって、社殿・境内が拡張され信仰を集めたようです。ちなみに舟入は干潟で舟の入港場であったことからついた名前で、近世の干拓によって生まれた町です。

その後、コンクリート橋に架け替えられた住吉橋は、昭和20年（1945）の被爆には耐えたものの水害で流されました。一旦、復旧された橋も、再び26年10月のルース台風によって流失しました。現在の住吉橋は、この災害による橋梁復旧工事で架けられた橋です。流失原因が詳細に調査・検討された結果、基礎の根入れ不足を解消するためニューマチックケーソン工法が採用されました。また、上部工は従来の構造より長径間の橋梁が得策であるとの考え方から、わが国では初めてとなる鋼ローゼ橋に決定され、昭和29年完成しました。

住吉橋記念燈は被爆からも倒壊をまぬがれ、焦土の中で立ち続けていました。しかし、建立から80数年、太田川高潮対策事業により撤去となりましたが、地元民の記念燈建立への想いを汲み取り、元の位置に復元されました。

現在、住吉橋上流の国道2号に架かる新住吉橋が主要道路となっていますが、住吉さんの門前に架かるこの橋は、地元の人々にとって愛着ある橋として今日も利用されています。

■位置図



住吉橋親柱



住吉神社「平和のともしび」から浮かび上がる住吉橋を望む



住吉橋記念燈